頭脳循環を加速する若手研究者戦略的海外派遣プログラム
–アジア・アフリカ生存基盤研究のためのグローバルプラットフォーム構築–
報告書

現代アフリカにおける持続型生存基盤としての在来犁農耕の可能性

派遣者　：田中　利和
派遣期間：2014 年 4 月 30 日～2014 年 5 月 22 日　(22 日間)
派遣先　：アジスアベバ大学エチオピア研究所（エチオピア）

キーワード：犁農耕、牛耕、エチオピア中央高原、オロモ、農耕技術の変容

１．　研究課題について

現代のアフリカは人口増加とそれを賄う食料需用の増大という問題を抱えている。かぎられた土地のなかで、集約的かつ安定した農業の必要に直面していることは間違いない。掛谷は以上の問題を考えるうえで、これまでにアフリカの大地が育ててきた集約的な在来農業に目を向けそこから多くを学ぶ必要があるのではないかと主張する（掛谷 2002)。アフリカの在来集約農業の１つとして、エチオピア中央高原に暮らすオロモの人びとが実践してきた、農法的に高度な発達段階と理解できる「牛耕」、つまり、ウシを用いた「犁農耕」について検討することは、現代的なアフリカの農民の持続型の生存基盤を考察するうえで重要な課題であると考える。本研究では、人びとの生存基盤としての犁農耕の可能性について、実証的データを用いて総合的に明らかにすることを目的とする。その結果を他の地域での農業実践の事例と比較をすることで、その特性を理解し、有用性と応用の可能性について検証する。

２．　派遣の内容

2014 年 4 月 30 日から 2014 年 5 月 22 日にかけて 22 日間エチオピアに渡航した。首都のアジスアベバでは、受け入れ研究者であるアジスアベバ大学のマモ・ヘボ氏と今年度の研究計画についての相談、エチオピアでの調査許可証の更新、農業開発の実務者との研究テーマの協議が主な目的であった。また 2007 年から継続的に調査をおこなっている、オロミヤ州南西ショワ県ウォリソ群デ

ィレディラティ村、ガーグレ地区を2年ぶりに訪問して、参与観察と聞き取り調査をおこなった。おもな目的は、現在の犁農耕に関する実態を把握することと、人びとが抱える問題や、その対処について、人びとの戦略を探ることであった。これまでお世話になってきた、バルチャ・フィーテ氏の世帯に再び滞在させてもらい、牛耕の始まるこの季節の、牛耕の参与観察、畑の作付体系の記録、および犁農耕に関する近年の農業技術の変遷などについて聞き取り調査をおこなった。

３．　派遣中の印象に残った経験や体験

今回の派遣では、この2年間における犁農耕体系の変遷について知ることができた。これまでの研究では、牛耕を行なう犁耕畑は、主に穀類のテフをはじめ、トウモロコシ、コムギ、ソルガムが栽培され、根菜類が犁耕畑に植え付けられることは稀であった。しかし、今年度から根菜類のジャガイモを植える農家世帯が増えてきていることがわかった。ジャガイモは牛耕の耕起回数が穀類に比べて少なくてすむことに加えて、穀類より早い時期に作付可能であるため、穀類が不足する時期の食料として有用であると語ってくれる農民がいた。現在食料基盤を強化するために、地域の条件に適合する、新たな栽培植物を導入しようという試みが、農民の主体的な動きによって、目の前で実践されていることは非常に印象的であった。

栽培植物の導入に加えて、牛耕技術の変遷についてもあわせて聞き取り調査をおこなった。10年前までは、トウモロコシは散播が中心であったにも関わらず、一気に条播が定着したという。これは労働量に見合った収穫を得られたためであったという意見が多い。それに加えて、エチオピアの農業省は収穫量の向上を目的として、テフとコムギに関しても条播を農民に推奨しているという。コムギに関しても、この2年で条播を試みる世帯がでてきているが、ある世帯では条播は、労働力を多く必要とするのに対しに、それに見合った収穫量の増加が、この2年では得られず、散播とさほど変わりがなかったと回答した。そのような評判がある中でも、今年度にコムギの条播を試してみたいと考えている農民もいるので、播種の時期の参与観察および収穫後の調査は今後重要になってくると感じた。

今後このような農民自身による農業技術の変容の過程を、実証的データの収集を通じて具体的に浮き彫りにしていくことの重要性を感じた。以上の作業を

つうじて農民の生存基盤としての在来犁農耕の論理の解明に努めていきたい。

４．　目的の達成度や反省点

今回の 22 日間の派遣では、アジスアベバ大学のマモ・ヘボ氏との今年度の研究計画についての議論、および 2014 年 5 月 20 日 JICA エチオピア事務所でおこなわれた、農業分野勉強会で農業開発の実務者と、報告者のこれまでの研究テーマの協議を通じて、今年度の研究計画の研摩ができたと思っている。また調査地でも、生存基盤としての犁農耕を考察するうえでの、農耕技術の変容という現代的なテーマを発見できた点では、当初の目標をある程度達成できたと考えている。今回は 22 日間というこれまでおこなったことがない短い期間だったので、スケジューリングと、予定がずれても臨機応変に対応していく調整能力がさらに重要になっていくと感じた。また、今後は、調査地の農耕形態をより相対化するために、広域調査を実施し、さまざまな研究者、実務者、農民との交流を活発にしていく必要性があると思った。

５．　今後の派遣における課題と目標

次回の 6 月 10 日からの渡航では、調査地の牛耕期間の 7 月末までは、集中的に犁農耕の実証的データの収集に努め、現代アフリカにおける在来犁農耕を考察するうえでの基礎資料の蓄積を課題とする。特に今年度は、古くから行なわれてきたコムギとテフの散播が条播に切り替わる可能性があるため農民の播種の現場に着目したい。並行して、調査地の犁農耕の特徴を把握するため、調査地域の農民を連れて、生態環境が異なる近隣の他の地域を訪問し、当該地域の農民を交えた、意見交換を行い、調査地の犁農耕の特徴を相対化することを試みる。

牛耕が終わる 8 月からは、犁農耕に関する研究テーマを扱っている、研究者との交流を活発にすることを目指す。2015 年 2 月に開催予定である国際シンポジウムに向けて、該当する研究者を調査地に招き、調査地でシンポジウムに関する議論、および犁農耕に関する議論を深めていきたいと考えている。

写真１　トウモロコシの条播はウシと犂を用いて溝を創る整地作業を行なう

写真２　JICA エチオピア事務所で行われた農業分野研究会での発表の様子